

What Maisie Knew 試論

— メイジーとその仲間たちの「別れ」を中心に —

中 窪 靖*

A Study of What Maisie Knew

On the Elimination and Subsequent Independence of
Maisie and Her Comrades

Yasushi Nakakubo

はじめに

1895年1月5日、ヘンリー・ジェイムズは、彼の人生の中での非常に大きな事件に遭遇する。この日、彼は劇作への試みが完全に失敗したことを知らされる。彼は、*Guy Domville* の舞台挨拶に立ち、その聴衆から激しい罵声を浴びる。彼の劇作への試みは、当時の聴衆には不向きなところがあったのかもしれない。このような結果から判断するならば、彼はこれまで彼が踏襲してきた小説執筆上の方法をこの劇作というジャンルにも当てはめようとしたと考えられる。それは、方法としてはやや不向きな方法といえるであろう。それは、当時好評を博していたオスカー・ワイルドの劇とは正反対といっても良いほどの違いであったのかもしれない¹。しばしば言及されることであるけれども、彼の劇作は、いわゆる「説明」が多すぎる。彼の小説作品に見られるごとく、彼はその劇作に於いても登場人物たちの心理描写を克明に描くことを旨とした。そうすると勢い、作家のコメントが先行し、観客にとっては「くだい」という印象を与えかねない。彼が聴衆から罵声を浴びたのも、この辺りのことが影響したのかもしれない

い。

結局、彼は、劇作が彼には不向きなジャンルであったことを思い知らされることになる。これは彼に別の道を模索させることになる。彼が「精魂」を傾けた劇、*Guy Domville* のこの無惨な失敗は、ジェイムズの作家生活に大きな転機を与えることになる。それ以降、彼にとって、大英帝国の首都、ロンドンには必ずしも「居心地のよい」場所ではないという思いが、より強くなってしまった。1876年に永住を決意し、約20年間生活の場であったこの都会はもはや彼を「暖かく包み込む」力を失ってしまった。彼は、イングランド南部の田舎を旅行中にサセックス州のライに格好の屋敷を見つける。程なくそこに移り住むことになる²。そして、それ以降彼の創作の場はそこに移される。彼は、心の安らぎを求めて田園へを引きこもってしまうのである。しかしながら、この決意は、彼に新たな創作方向を決める大きな転機を与えることになった。この時期の手紙の中で、彼は次のような思いを吐露している。その中の一つには、サセックス州の町、ヴィカレジとロンドンとの違いについて述べている。彼は、「ロンドンは今や死んでいるに等しいのに対して、ヴィカレジ

* 米文学

は私を受け入れ癒してくれる」という喜びを表現している。また、相前後する別な手紙の中には、「今年は冬になってもロンドンには戻らないで、田舎の家で過ごすつもりだ」というロンドン対する一種の嫌悪の気持ちが述べられる³。

ところで、この時期のジェイムズの作品には、当時のロンドンを中心とした大英帝国の「腐敗」をそのテーマとしたものが多い。その意味での格好の作品を思い浮かべてみると、*What Maisie Knew* (1897)が思い当たるのではないだろうか。またこの作品が、彼の劇作失敗後の初の「中編」小説であるということも注目するに値する理由となろう。もう一つの大きな彼の変化は、これまでの手書き原稿から、タイプ原稿へと創作の方法を変化させたことである。彼は、1896年 *What Maisie Knew* の執筆中に手首の痛みを感じ、手書きを続けることが困難となった。彼はそのためのアシスタントを雇い入れることとなる。その方法としては、彼が語ることを、アシスタントがタイプしていくという体裁をとることになり、彼の文体は、変化を見せ始める。彼の作り上げる文章は、挿入語句が多用されることにより、より長いものになる⁴。

さて、*What Maisie Knew* は身勝手な両親を持ったある少女の物語である。しかしながら、この定義ではこの物語について、半分も説明したことにはならないのである。ジェイムズ自身が説明しているように、物語は、メイジー・ファランジという少女の意識の描写に最大の力点が置かれている⁵。作家にとっては、主人公は少年であってはならない。「少女」でなければならないのである。ジェイムズは幼い「少女」の認識力 (sensibility) に無限の期待をかけている。この作者の意図は十分に反映されていると考えてよいであろう。この物語は終始この「女

主人公」の意識を通じて語られるからである。もちろん、この物語を読む楽しみは、この一点に集約されるわけではない。登場人物たちの相互の関わりという事柄にも読者の興味を引きつけて止まない要素が含まれている。

彼の劇作品には説明が多すぎるということについて言及したが、彼が心理描写を重要視していることからすれば当然の結果だといえる。それは、この作品に於いても遺憾なく発揮されている。むしろ、主人公メイジーの中でのびのびと発揮されているというべきかもしれない。また、当時のイギリス社会の「腐敗」については、極端な形で、物語の中に組み込まれている。また、「少女」の認識力の強さについては、見事に描き込まれている。そして、苦渋を味わうことになった劇作への試み、つまりその経験から得たものは「ユーモア」の切れとなって現れていると思われる。加えて、彼の特徴でもある「晦渋」な文体もここではその萌芽として、比較的、違和感なく溶け込んでいるのではないだろうか。

I 章

この作品の中では、「別れ」ということに重きが置かれているように思われる。冒頭、物語は離婚の調停についての作者の描写から始まる。主人公はいうまでもなく、彼女を取り巻く人物たちもまた「別れ」という憂き目にあう。また、この物語を分析するに際して、重要なキー・ワードになるのは、「捨てられる (being got rid of)」という言葉であろう。主人公メイジーはいうまでもなく、「彼女の周りにいる大人たちの大半」もやはり「捨てられる」ことになる。主人公、メイジー・ファランジは、母アイダと父ビールという両親の都合で、それぞれの親のところとに一定期間預けられるという人生を歩み

歩み始める。

さて、このようにして始まった幼いメイジーの人生は、再び両親の都合で、大きな人生の分岐点に至る。母親も父親も、彼女と永久に「絆」を切るべく策略を巡らし始める。母アイダとの『別れの儀式』は次のようにして始まった。娘と家庭教師のいる部屋へと「突然に慌ただしく」現れたアイダは、「おまえの面倒を見てくれる人は、今日からはクロードさんだからね」と言い放つ。その理由として、彼女は彼が彼女のことを悪く吹聴して、その結果彼女が悪人に仕立て上げられているというのである。つまり、彼女は、「悪人」アイダとして、娘に見限られたというのである。

... Maisie wept on Mrs Wix's bosom after hearing that Sir Claude was a butterfly; considering moreover, that her governess but half-patched it up in coming out at various moments the next few days with the opinion that it was proper to his 'station' to be careless and free. That had been proper to everyone's station that she had yet encountered save poor Mrs Wix's own, and the particular merit of Sir Claude had seemed precisely that he was different from everyone....

...He appeared to accept the idea that he had taken her over and made her, as he said, his particular lark;...⁶

余りにも突然のことで、幼い主人公は家庭教師の胸に飛び込んで涙を流すしかなかった。ここには、サー・クロードという事実上の義理の父親が彼女にとって如何に「頼りがいのある人物」であるかが描かれている。メイジーの中で

は、彼は細かなことにあくせくしないおおらかな人物である。ところで、彼女には、彼が他の人とは「異なっ」ているように、そして「彼女を受け入れる」という母の要求を承諾しているように見える。彼女にとっては、この彼の「決意」は大変有り難いことであるに違いない。母は娘に対して、「直接的な」言葉で別れようとしているのではないが、アイダの苛立った感情の揺れはメイジーの心に映し出され、我々の元に届けられる。

メイジーの視点を通じて我々は、母親の剣幕に怯える娘の様子を理解する。感受性の強い主人公⁷であってみれば、当然のことであるが、次第にメイジーは「何かしら自分には理解できないことが母の家で起こっていることく... something beyond her knowledge had taken place in the house.(90)>」を認識し始める。そして、さらには、「母は、もはや愛されていない。<...her mother was no longer in love.(91)>」ということをも認識するに至る。「母が愛されていないということは、つまり、サー・クロードと旨くいっていないことは...」とメイジーの認識は「核心」へと近づいたのかもしれない。続く第12章では、その彼女の理解を助けるようにサー・クロードが重要なことを彼女に伝える。彼はアイダから「蔑まれている」のである。

...If there was a type Ida despised, Sir Claude communicated to Maisie, it was the man who pottered about town of a Sunday; and he also mentioned how often she had declared to him that if he had a grain of spirit he would be ashamed to accept a menial position about Mr Farange's daughter. It was her ladyship's contention

that he was in craven fear of his predecessor — otherwise he would recognize it as an obligation of plain decency to protect his wife against the outrage of that person's barefaced attempt to swindle her....(103)

メイジーの頭の中では、次のように理解されていたのかもしれない。母は、サー・クロードを「毛嫌い」している。そして、私にはよく分からないけれど、私は母を「憎んで」いるのだという。さらに、このことに加えて、我々は次のことにも留意しなければならないであろう。アイダには、ベリアムという新しい「男友達」がいるのである。メイジーは実際にこの「新しい恋人」と対面する。このことと、メイジーが認識しつつあることが結びついて一つの事柄が見えてくる。サー・クロードは、もはや母の恋の相手ではない。そして、娘のメイジーも、恋の相手というのではないけれど、母との「関係」が切れてしまっている。いや、それが早急な結論とするならば、今や「関係」は弱まりつつあるのである。

ところで、もう少し物語を読み進むと、この問題の一応の決着が図られる。第21章に於いて、母アイダは、娘にアフリカ行きを報告をする。ついて来るか来ないかはメイジーの自由だという口調ではあるが、それは娘に「永久の別れ」を告げるためのポーズにすぎないということは明白である。この頃になると、メイジーの認識力はかなり伸張しているのだから、すぐに母の意図することに気付いている。一方、相前後して、父ビールからも印籠を渡され、メイジーは「永久の別れ」の儀式を済ませてしまう。これは、彼女の精神的な意味を含めた成長のための一種のイニシエーションと位置づけるべきかもしれない。ともかく、主人公メイジーは両親に「捨

てられる」という憂き目にあう⁸。

第12章は別な意味でも重要な章である。この章は、この物語の中で一つの分岐点の役割を果たしている。メイジーを含めて、三人の登場人物がそれぞれ第2の人生を見つける必要に迫られる。つまり、「捨てられる」のはメイジーだけではない。

すでにその中の一部について言及したのだが、サー・クロードは、メイジーの母から「頼りない男」というレッテルを貼り付けられていた。よくもまあ、大の男が小さな子供の言いなりになったものだわ！とアイダに罵られていた。この章が始まるとすぐに、我々は、ウィックス先生というメイジーの家庭教師から、怒りで興奮した言葉を聞かされることになる。

...Then it was that, completely relaxed, demoralized as she had never been, Mrs Wix suffered her wound to bleed and her resentment to gush. Her great bitterness was that Ida had called her false, denounced her hypocrisy and duplicity, reviled her spying and tattling, her lying and grovelling to Sir Claude....(97)

ここでも、サー・クロードの場合と同様、主人公の母、アイダの激しい気性が浮き彫りにされている。ウィックスも彼女から罵声を浴びせられたのである。この人物は、両親が別居を始めてからメイジーの家庭教師としてアイダに雇われている。今引用しているこの箇所からは、使用人であるということを差し引いても耐えることのできないほど酷い仕打ちを受けたというウィックスの気持ちが伝わってくる。そこで、物語は彼女の「思い切った」提案を我々に提示することになる。彼女は、幼いメイジーの「世

話係」を名乗り出るのである。今私は彼女のこの提案について、「思い切った」という形容詞を付けて表現したが、それはメイジーが「勇気ある行動という風に驚きをもってその家庭教師の行動を評価しているく...Maisie appreciated the courage with which her governess handled it.(98)>」からである。ところが、この家庭教師の行動を見方を変えて見てみると、それは主人からの決別の宣言と読めるように思われる。そして、ウィックスはその行動を共にする同士としてサー・クロードに白羽の矢を立てたのである。すでに見たように、彼もまたアイダからいわゆる「三行半」を突きつけられていた。彼も今後の身の振り方を考える必要に迫られていたと考えるのが順当であろう。つまり、こうしてメイジー、ウィックス、そしてサー・クロードという三人の人物が、アイダから「捨てられた」と言うことができよう。しかしながら、一見素晴らしく見えるこの「提案」はサー・クロードに受け入れられない。ウィックス自身、この提案の裏には彼女自身の思惑があるのだが、同様に、サー・クロードの方にも心に思うところがあつたのである。

物語も結末を迎える頃になると、このメイジーの義理の父の考えていることは次第に明らかになってくる。彼は、既に、メイジーを「味方」に付けたという咎により、アイダより激しい非難の言葉を浴びていた。それは、メイジーの母親への愛情の炎を小さくする要素となつたのであろう。最終的には、彼はメイジーの父親と暮らしていたミス・ビール（かつての家庭教師、オーヴァーモア先生）とともに暮らすことを選び、その口実としてメイジーを引き取ろうとする。一方、相手の人物を見切る早さにかけては、アイダの右に出る者はない。彼女は、早々に彼を見限ることとなつたのである。それについて

は、彼女の新しい恋人と黙される人物が続いて登場することが示していくことになる。ペリアム氏と、キャプテンがそれである。ペリアム氏については、既にメイジーは知っている。彼は、母親と連れだって、その邸に現れたことがある（第11章）。そして、しばらくすると、メイジーはキャプテンに出会う（第15章）。サー・クロードとケンジントンパークを訪れたとき、母が彼と一緒にいるところに出くわしたのである。母がサー・クロードと話をしている間、暫し、メイジーはキャプテンと話を交わす。キャプテンは、彼女に始終母アイダを賞賛する言葉を告げるのである。メイジーは、このキャプテンとの話の中で、母に対する印象を多少変化させている。それは、想像以上に、母は「良い」人なのではないかと思わせるようなものであつたからである。一方、クロードは、メイジーにとって有益な人物であろうか。また、彼はメイジーにとって「恋人」のような存在となりうるのだろうか。批評家たちの中には、この点に注目するものもいる。もちろん、少なくとも、彼はメイジーにとって「必要」な人物の一人であることには変わりはない。メイジーは、この後も彼との関わりの中で、行動をしていくからである。では、もう一人の「捨てられた」人物、ウィックスとはどのような人物であるのか。彼女は、サー・クロードを恋している。それ故、彼女の判断は行き着くところ、この感情に大きく左右される。既にサー・クロードのところで述べたように、彼女によれば、彼女が彼の力を借りてメイジーの親になることは、「正しい道」なのである。メイジーの目には、彼女の母アイダにいわば、「解雇通告」を受けた先生は、ことあるごとに、彼女の主人への不満を吐露していると映る。ウィックスが言うところによれば、アイダは、「恐ろしい言葉で」彼女を追いだし、

彼女に「低級の烙印を押し」たのだった。それは、さながら「虐待」されているに等しいのだった。

ところで、彼女がこうしたことをメイジーとサー・クロードの前で吐露するとき、ある注目すべき言葉を発している。

... 'Why need you mind that — if you've done it for so high a motive? Think of the beauty of it,' the good lady pressed.

'Of bolting with you?' Sir Claude ejaculated. She faintly smiled — she even faintly coloured. 'So far from doing you harm it will do you the highest good. Sir Claude, if you'll listen to me, it will save you.'

'Save me from what?'

Maisie, at this question, waited with renewed suspense for an answer that would bring the thing to some finer point than their companion had brought it to before. But there was on the contrary only more mystification in Mrs Wix's reply. 'Ah from you know what!'

'Do you mean from some other woman!'

'Yes — from a real bad one.' (100)

ウィックスは、後に、サー・クロードがミセス・ビールと度々出会って、親密な関係にあったことを知ったとき大きなショックを受けている(第13章)。そのことを加味するなら、このサー・クロードとの会話の中で仄めかされている「本当に悪い女」とは、ミセス・ビールのことだと理解できる。メイジーの家庭教師が今最も「憎んでいる」女性とは、これまでの説明から理解されるように、彼女の主人のアイダその人であるはずだ。ところが、この引用の中で仄

めかされる女性は、彼女の女主人とは考えにくい。もちろん、その人物とは、ミセス・ビールと考えるとストーリーに矛盾が生じることになる。では、どうしてこのようなことが起こったのだろうか。それは、ウィックスの中に、サー・クロードへの恋情が渦巻いていて、その恋人の回りに現れる者はすべて「悪い者」というレッテルが貼られてしまうからなのである。それ故、彼女の道徳意識は、彼女の基準に当てはまりこそすれ、偏見に彩られない中立的なものとは決して言えないのである。そして、彼女のこのような感情は、当のサー・クロードには歓迎されているとは言えない。この箇所の彼の反応に見られるように、彼には、ある意味で有難迷惑といった類のものなのである。

さらにこの引用について、メイジーの受けた印象に注目してみると、彼女は、今私が説明した核心については理解していないことが分かる。メイジーの理解は、「女」という言葉が意味するものの表面的な部分の理解に留まっている。つまり、彼女は、その場にいる二人の大人が意味している女性がミセス・ビールであるとは夢にも思っていない。この点は、彼女がまだ「幼い」少女であることを再確認させるためのテクニクかもしれない。

II 章

前章にて、私は主要人物たちの「捨てられる」という問題について論じてきた。次に私は、この問題と表裏一体をなすと思われる「自由」ということを考えてみたい。この作品は結末部分に「注目」すべき箇所が置かれている。それは「捨てられた」登場人物たちが、それぞれ進むべき道を模索する様子を時にはコミカルに、時にはシリアスに描写している。そこからは、彼ら

の我がままな様子が垣間見られる。「捨てられた」登場人物たちが、最後に繰り広げられることは、大変興味深いものである。物語はそれぞれの人物たちの思惑が成就されるのかどうか、ある種緊張をはらんで展開していく。いくつか注目すべき場面が存在しているが、その中でも第31章で、メイジーとサー・クロードが繰り広げる「ゲーム」は見応えのあるものである。

遅い朝食を済ませた二人は、ホテルへの帰路重い足取りの中少しでも辿り着くのを遅らせたという気持ちを表す。そして、彼らの辿り着いた場所は「駅」であった。ここから鉄道に乗り込めば、彼らは二人だけでパリに向かうことができるのである。しかしながら、彼らの乗ろうとした列車は彼らが躊躇っているうちに発車してしまう。そこで、彼らの思いつきではあったが、これをもし実行していたらどうなっていたのかと想像力を逞くさせるようなことは、残念ながら起こらずに終わった。もちろん、我々は、すぐ後でメイジーの意識を通じてこの時の経緯を知ることができる。

...She had had a real fright but had fallen back to earth. The odd thing was that in her fall her fear too had been dashed down and broken. It was gone. She looked round at last, from where she had paused, at Sir Claude's, and then saw that his wasn't. It sat there with him on the bench to which, against the wall of the station, he had retreated,...(254)

すでに度々述べているように、彼女は周りの状況を「鋭く」感じ取っている。さらに、この最終場面に至っては、その認識力には「磨きがかかっている」と判断してよいであろう。これ

は、作者が「序文」の中で述べていることから、当然信頼してよいだろう⁹。彼女は、「懸命に戦いを挑んでいた『恐れ』が、完全に消え去った」と心の中で、述べている。しかし、同じように戦いを挑んでいた「クロードの『恐れ』は、未だ消えずその場に残っている」と見抜いている。これはこの後の彼に対する彼女の態度に大きな影響を与えたと思われる。この事実、彼女の「恐れ」は消え、彼の「恐れ」は逆に消えずに残ったということは、彼女自身が考えるように、奇妙なことであるが、一体何を意味するのであろうか。ところで、この「事件」が起こるまでの二人の心の中には、どことなく「不安」と呼べるような意識が重く存在していた。その中で、メイジーはサー・クロードとミセス・ビールとが「自由」なのだということを考え始めていた。私はこの認識を重視したいと考える。「自由だ」という意識、換言すれば、パートナーから解放されたという意識は、最初に私が注目した「捨てられた」ということと関連があるものと考えられる。

...they did all the old things exactly as if to try to get back all the old safety, to get something out of them that they had always got before. This had come before, whatever it was, without their trying, and nothing came now but the intenser consciousness of their quest and their subterfuge. The strangest thing of all was what had really happened to the old safety. What had really happened was that Sir Claude was 'free' and that Mrs Beale was 'free', and yet that the new medium was somehow still more oppressive than the old. She could feel that Sir Claude concurred

with her in the sense that the oppression would be worst at the inn,...(251-252)

若いメイジーであっても、この二人の大人たちがそれぞれのパートナーから解放されたことを知っている。もちろん、彼女は並の子供以上の認識力を有していることは忘れてはならないであろう。彼女は意識の中で、「古いこと」と「新しいこと」という言葉で、これまで彼女が理解していることと今彼女の身に起ころうとしていることを「考え始めて」いる。彼女の周りにはいる大人たちに起こったことが何だったのか、そして、これから起ころうとしていることはどのようなことなのかということをメイジーは彼女なりに理解している。すでに見たように、後者の方は、「できれば答えを出すのを遅らせたい問題」なのである。サー・クロードにとって、今脳裏にあって解決しなければならない問題とは、ミセス・ビールとの今後の生活、そして、二人がメイジーをどのように育てていくのか、という問題ではないだろうか。つまり、今後の二人の生活の中で、メイジーをどのように位置づけるべきかという問題であると言い換えてもよいと思われる。どうにかホテルに戻った彼を待ち受けていたのは、ミセス・ビールを説得することであった。一方、メイジーからは「交換条件」を突きつけられる。二人がこれから一緒に暮らしていくに際して、世間体を繕うためにメイジーの存在は是非とも必要であるというのがミセス・ビールの主張であり、もちろん少し前まで、彼自身もそう考えていた。一方、メイジーは、ウィックスと「別れ」る気持ちはあるが、そのためには彼の方も、ミセス・ビールと「別れ」なければならないと言う。これは彼には大変「酷な」事柄である。メイジーは彼がミセス・ビールのことが好きなのを見越してこの

ような提案をしたのであろう。彼はパートナーとして、ミセス・ビールを必要としているのであろうが、もはや世間体を繕う必要を感じなくなってきたのであろう。メイジーが「感じ取って」いたように、パリ行きの列車を見過ごした後、彼は一つの決意をしたのかもしれない（メイジーには、否定的な側面しか認識できていなかったけれども）。

さて、再び「自由」という問題を考えてみたい。

‘To you, you abominable little horror?’ that lady indignantly inquired, ‘and to this raving old demon who has filled your dreadful little mind with her wickedness? Have you been a hideous little hypocrite all these years that I’ve slaved to make you love me and deludedly believed you did?’

‘I love Sir Claude—I love him,’ Maisie replied with an awkward sense that she appeared to offer it as something that would do as well. Sir Claude had continued to pat her, and it was really an answer to his pats.

‘She hates you—she hates you,’ he observed with the oddest quietness to Mrs Beale.

His quietness made her blaze. ‘And you back her up in it and give me up to courage?’

‘No; I only insist that she’s free—she’s free.’.....(264)

最後の最後で彼は、メイジーを「解放」する事を決意するのである。もはや、彼は「言い訳」としてのメイジーを必要としないのである。こ

の箇所に見られている彼の認識に注目する必要がある。メイジーのことを「彼女は自由なのだ」と、彼は主張している。そして、メイジーはサー・クロードの「助け」を得て、彼への信頼の気持ちを表している。ここに来て、二人の間にはある「信頼」関係を、少なくとも二人の間だけで通じる「信頼」というものを獲得したのかもしれない。これは、メイジーを手に入れるといった類のものではない。二人の間では、このことは納得済みなのである。このことを証明するように、メイジーはミセス・ピールは言うまでもなく、彼も選ばない。彼女が最後に選んだのは、ウィックスであった。

III 章

サー・クロードの人物像の一端は、これまで述べてきた問題の中でも明らかとなっていると思われるが、ここではさらに別な面に光を当てたいと思う。第24章には、ウィックスがミセス・ピールを激しく批判する様子が描かれる。そのとき、彼はミセス・ピールを庇うような行動にでる。この時の彼は、彼らにミセス・ピールが完全にピールと別れたという知らせをもたらしたのだった。

“...My dear lady, you can't chuck a woman that way, especially taking the moment when she has been most insulted and wronged....(197)

ウィックスから、ミセス・ピールへの批判の言葉を受けて、この引用の中に現れているように、彼はそれに反論する。彼は、ミセス・ピールが批判されているのを黙っていることができない。彼は彼女を愛しているからである。彼の

このような態度は、彼の「真剣さ」の現れではないだろうか。もちろん、すでに述べたように、ウィックスはクロードに恋しているので、その恋敵を何とか蹴落とそうとしてミセス・ピールを非難すると考えられる。この章には、彼を恋するウィックスの「滑稽な」様が描かれている。それを（今述べてきた）クロードの「真剣さ」と重ね合わせるとき、様々な事柄が明らかとなってくる。

Oh he was princely indeed: that came out more and more with every word he said and with the particular way he said it, and Maisie could feel his mistress stiffen almost with anguish against the increase of his spell and then hurl herself as a desperate defence from it into the quite confessed poorness of violence, of iteration. 'You're afraid of her — afraid, afraid, afraid! Oh dear, oh dear, oh dear!' Mrs Wix wailed it with a high quaver, then broke down into a long shudder of helplessness and woe....(200)

例えば、ウィックスは別な箇所で、クロードの気持ちを探るように「私の気持ちは良く分かっているくせに！(197)」というふうに問いかけている。そして、ここでは、彼女は、クロードがミセス・ピールの言いなりになっていることに批判の目を向けることになる。「あなたは、彼女のことがこわいのよ」と叫ぶようにして、彼女は彼に懇願する。どうしてあなたは私のこのような気持ちを分かってくれないのかしら、という半ば訴えるような言葉が聞こえてきそうである。つまり、この章ではこのような彼女に対して、サー・クロードはすでに一例を挙げた

ように応戦していくのである。

ところで、この中にはもう一つ忘れてはならないことが存在している。それは、この様子を側で見ている人物がいるということである。それが、作者が「意識の中心」と称しているメイジー・ファランジである。この引用の中のメイジーは、クロードの「魔力」に抵抗するウィックスを哀れな存在と捉えている。メイジーの見たところ、ウィックスの抵抗は「効果のない」もので見ていて痛々しいのである。その結果、無駄な言葉の繰り返しをクロードにぶつけているだけなのである。しかしながら、「彼女はもうすでにクロードを支えとしてしまっているのである<...long before, she had obtained a 'hold' of him,...(200)>」。

メイジーは、「驚異」の存在である。著名な批評家、トニー・タナーも指摘するように¹⁰、彼女は周りの人々のみならず、我々をも「驚異」の渦に巻き込む存在である。また、ジェイムズ自身も言っているように、「彼女は自分自身に対しても驚き、最後には、子供時代を脱皮するのである」¹¹。その意味で、以下の箇所を目を向けたい。

...She had an add sense that it was the first time she had seen anyone but Mrs Wix really and truly scandalized, and this fed her inference, which grew and grew from moment to moment, that Mrs Wix was proving more of a force to reckon with than either of them had allowed so much room for. It was true that, long before, she had obtained a 'hold' of him, as she called it, different in kind from that obtained by Mrs Beale and originally by her ladyship. But Maisie could quite

feel with him now that he had really not expected this advantage to be driven so home. Oh they hadn't at all got to where Mrs Wix would stop, for the next minute she was driving harder than ever...(199-200)

我々はこのメイジーの意識を通じて、ウィックスの存在が「力を持ってきた」をいうことを理解する。それは、すぐ後に続く「確固とした足場」を、「ミセス・ビールのものとも、母のものとも違う足場」を確保したという認識と重ねて考える必要があるだろう。つまり、これは、ウィックスがメイジーを巡る三角形の中により強い存在として入り込んできたことの証しであろう。しかしながら、このことが必ずしも、クロードの望むものではないという否定的な認識も忘れてはいない。

ここでもう一度、例の「遅い朝食を取った」という場面を見ておきたい。ここに取り上げた「始まり」の部分には、メイジーもクロードも二人ともこれから起こることに対して、緊張の中身構えている様が描かれる。

...Hadr't they had the good time he had promised?—had he exaggerated a bit the arrangements made for their pleasure? Maisie had something—not all there was—to say of his success and of their gratitude: she had a complication of thought that grew every minute; grew with the consciousness that she had never seen him in this particular state in which he had been given back....(241)

先に見たウィックスの「変化の様」を認識していたのと同様、ここでもメイジーは鋭い認識

力を発揮している。今回はサー・クロードの「変化の様」である。それは、彼の重大な決意の前の躊躇いの様の描写である。これは、すでに述べた「馮での出来事」の前段階の描写である。ここで、最後に検証してきた二人の人物の「様子」はメイジーの最後の選択を理解するための手がかりを与えてくれるような気がする。彼女はやはり最後は、「躊躇う」クロード¹²ではなく、「強さを感じさせる」ウィックスを選ぶのである。

最後に、メイジーについて付け加えておきたいことがある。この作品は次のように締め括られる。

Mrs Wix gave a sidelong look. She still had room for wonder at what Maisie knew. (266)

私はメイジーについてもいくつかの注目すべき点を指摘してきたが、この最後の一節はそのような彼女を端的に表現している。確かに、彼女は、彼女を取り巻く大人たちのみならず、我々読者をも大いに「驚かせて」くれた。それ故、この後も大いに大人たちを驚かせてくれるであろう。恐らく、この後その「犠牲者」となるのはウィックスであろうと想像される。

結 び

今回、私は、ジェームズの作品 *What Maisie Knew* (1897)を「捨てられる」という部分と、「自由になる」という部分の二つの側面から分析することにした。まず、前者の「捨てられる」という側面からは、この物語の中心人物たちの役割が浮き彫りにされたのではないかと思う。今再度その例を挙げるとすれば、サー・クロード

のことを思い出さなければならないであろう。彼は、メイジーの母、アイダに「捨てられる」ことになるのだが、それを悲しむという様子は見せない。彼は、極めてのんきでおおらかな性格で、すぐさま次の行動に移ったように見受けられる。しかし、ここで一つ注意を要するのは、彼の様子を見ているのが幼い主人公であったという事実である。それ故、彼女の気付いていないところで、彼の人間臭さは明らかにされているのかもしれない。ともあれ、彼は次のパートナーとして、ミセス・ビールを見出すこととなった。しかし、最後に彼がとった行動は不可思議な印象を感じざるを得ない。

一方、「自由になる」という後者の側面からは、それぞれこの問題に関わる人物たちの中で、「ある関わりから解放される」ということの意味が明白になったように思う。彼らは、その「関わり」から解放されたとき、果敢に次のステップへと踏み出した。ウィックスは、彼女の「道徳観」から、不道徳な行動をする人物を批判したが、それはあくまでも彼女の考える「範疇」を出ないものであった。そこには、首尾一貫性がないという批判よりも、滑稽さを暴露しているという側面が強く伝わってきた。また、サー・クロードと、ミセス・ビールとは、彼らの利益を優先する余り、その対象となる人物の気持ちの側に立つことができず、結局必要であったものを逃してしまふ。

また、最後に、主人公メイジーに目を向けると、彼女の「意識の中心」としての役割が明らかになっていたのでないだろうか。つまり、この物語の中の出来事の流れを知るには彼女の目というフィルターが必要であった。そして、彼女の最後の「選択」は我々に少しショックを与えたのではないだろうか。女主人公が最後に自分自身の選択をするという終わり方は、彼の

著名な作品 *The Portrait of a Lady* (1881) にも通じるものである。その意味では、この作品も彼の理想的な終わり方で締めくくることができたと言えるような気がする。

Notes

1. その代表としては *The Importance of Being Earnest* をあげることができる。実は、その当日ジェイムズはワイルドの舞台に出掛けるこの劇を鑑賞していたが、その時の印象は次のようであったとエデルは要約している。

...Oscar's play had been helpless, crude, clumsy, feeble, vulgar — he later would all these adjectives at it. And yet — it was almost unbelievable — the audience had liked it...

< Leon Edel, *The Life of Henry James 2* (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1977) 150.

2. エデルはジェイムズの『書簡集』の序文の中で次のように述べている。

...The summer of 1896 had been spent at Playden, a hilltop looking across a valley at Rye topped by its church near Lamb House. At Playden James wrote *The Spoils of Poynton* and read proofs of *The Other House*. In the autumn he moved to the Old Vicarage in Rye and saw Lamb House, which he would acquire two years later as his permanent home.... by the summer of 1898 he was established in his Rye house after letting his De Vere Gardens flat. There were the stages of his withdrawal from London, where he had lived for twenty years.

< *Henry James Letters Vol. VI 1895-1916*, ed. Leon Edel (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1984) 4.

3. 1895年から1896年にかけての手紙を見てみると、彼がロンドンを離れた田園地帯で、気持ちの入れ替えを図っていることが理解できる。例えば、1896年7月25日にエドモンド・ゴッスに宛てた手紙の中で次のように述べる。

... — the prosy Vicarage receives me. But I rejoice to have any immediate refuge. I'm afraid London has been deadly these last days. But this place has been deadly too, and I scarcely stir off the terrace.... (*Letters IV*, 33.)

また、その前年の1895年9月30日に兄に宛てた手紙の中で、次のように述べている。

...I would give a great deal not to be going back to London for the Winter — I yearn to spend it in the so simplified country. But I must live part of the time at least in the house I have, and if I wish to keep my servants I mustn't abandon them for months — they simply rot. I have, thank God, quantities of work on hand and in prospect, and with better powers to do it than ever before.... (*Letters IV*, 21.)

4. エデルは、*Letters IV*, 4.の中で以下のように説明している。

...He began then to dictate to MacAlpine, who was a shorthand reporter; finding that it took MacAlpine several days to transcribe his shorthand notes, James purchased a typewriter and practiced dictating directly to a typist. By the time he moved into Lamb House this had become his permanent way of work. His late novels were dictated to Mary Weld, who on leaving him to get married was replaced (after James's American trip) by the gifted Theodora Bosanquet, who in later life became herself a writer and editor....

5. *Henry James, Penguin Classics What Maisie Knew* eds. Paul Theroux and Patricia Crick (Penguin Books, 1985) 26. 特にこれは、ニュー・ヨーク版の「序文」からの引用であることを明記しておく。

All this would be to say, I at once recognized, that my light vessel of consciousness, swaying in such a draught, couldn't be with verisimilitude a rude little boy; since, . . . the sensibility of the female young is indubitably, for early youth, the greater, and my plan would call, on the part of my protagonist, for 'no end' of sensibility. . . .

6. *Henry James, Penguin Classics What Maisie Knew* eds. Paul Theroux and Patricia Crick (Penguin Books, 1985) 89. 以後この作品からの引用は末尾に頁数を示すこととする。

7. *What Maisie Knew*, 26.

8. 母と最後の「別れ」を済ました後、メイジーは、以下のごとくそのことについてサー・クロードと「語り合う」。

...They talked but little, and she was slightly surprised at his asking for no more news of what her mother had said; but she had no need to talk—there were a sense and a sound in everything to which words had nothing to add. They smoked and smoked, and there was a sweetness in her stepfather's silence. At last he said: 'Let us take another turn—but you must go to bed soon. Oh you know, we're going to have a system!' Their turn was back into the garden, along the dusky paths from which they could see the black masts and the red lights of boats and hear the calls and cries that evidently had to do with happy foreign travel; and their system was

once more to get on beautifully in this further lounge without a definite exchange. Yet he finally spoke—he broke out as he tossed away the match from which he had taken a fresh light: 'I must go for a stroll. I'm in a fidget—I must walk it off.' She fell in with this as she fell in with everything;... (180)

9. *What Maisie Knew*, 26.

10. Tony Tanner, *Henry James The Writer and His Work* (Amherst, Mass.: Univ. of Massachusetts Press) 89-90.

11. *What Maisie Knew*, 28.

...Successfully to resist (to resist, that is, the strain of observation and the assault of experience) what would that be, on the part of so young a person, but to remain fresh, and still fresh, and to have even a freshness to communicate?—the case being with Maisie to the end that she treats her friends to the rich little spectacle of objects embalmed in her wonder. She wonders, in other words, to the end, to the death—the death of her childhood, properly speaking;...

12. ミリセント・ベルは、彼の「恐れ」はミス・ピールに対するものであることを指摘している。また、彼女は最初のパートナーである、メイジーの母親に対しても同様な「恐れ」を抱いていたと解釈している。

Millicent Bell, *Meaning in Henry James* (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1991) 255

...Sir Claude, for his part, admits that he married Ida because he was afraid of her, and as soon as he is in love with Mrs. Beale he is afraid of her, too—as he would be of Maisie herself, if she were older.

A Study of *What Maisie Knew*

On the Elimination and Subsequent Independence of
Maisie and Her Comrades

Yasushi Nakakubo

What Maisie Knew (1897) was written by Henry James after he had experienced a plight upon appearing on stage to receive “good applause” from the audience. His drama, *Guy Domville* (1895), had been despised by the public. Yet, the incident afforded him the opportunity to try a “new type of work”. After he began to write again, his new works differed slightly from those he had composed before his works were performed on stage. Some good critics even say his works changed considerably. In the middle of his career as a writer, James challenged the so-called “scandal stories in middle class society”, and after this unfavorable acceptance of *Guy Domville*, he continued his experimentation with this type of story.

In this essay, I have focused on some “attractive people”, Sir Claude, Mrs. Wix and Mrs. Beale, as well as Maisie. The story begins with one “decision”. The heroine, Maisie, is forced to visit each of her parents at some time. Maisie possesses the trait of not being a dependent person. However, in beginning her own adventure of consciousness, she manages to notice quite a few things around her, and she begins to make some decisions for herself.

Initially, I began to examine how the various characters parted with their “good” partners. Frequently, separation occurred without Maisie understanding the complete circumstances. James seems to place these characters in bad situations; nevertheless, they start to find another way to work through their problems. Next, I gave attention to the various characters’ life stages. They often state that they are now “free”. Through this freedom, they all manage to find their new partners, and start a new life; however, it must be noted that some of them do fail in their attempts to start anew. No matter when they try to lead a “new life”, they need our heroine. Competition for Maisie’s attention arises. As the story progresses, it becomes quite apparent just how indispensable the heroine really is. We are able to understand what is happening to the various characters through her eyes. Finally, I examined how the various characters were able to make their final and important decisions. The dynamics between the various characters are quite interesting. What is most charming is the final decision that Maisie herself makes. She makes a decision to be with Mrs. Wix. Of course, she is always in the center of this story, and James has decided to give her best “sensitivity” among all of the characters.

Eventually, our heroine makes the best decision. The decision may cause problems for her, but she takes her new step independently. I believe that Maisie has considered both Mrs.

Wix to be better than Sir Claude even though she has a “biased” moral sense. It is quite possible that Maisie has come to realize that her father-in-law is unreliable because he has failed to make his own independent decision.